９月度「京都学ラウンジ　ミニ講座」（開催報告）

2020 年１０月１日
京 都 学 ・ 歴 彩 館
０７５−７２３−４８３５

京都学・歴彩館では、京都について学ぶ楽しみを広げる目的で、毎週木曜日に「京都学ラウンジ　ミニ講座」を開催しております。この度９月１０日（木）～１０月１日（木）にかけて「私の洛中洛外図研究」と題して、４回開催しましたので、下記のとおり報告します。

記

■ 日　　時　　２０２０年 ９月１０日・１７日・２４日・１０月１日
いずれも木曜日１３：３０～１４：００

■ 会　　場　　京都府立京都学・歴彩館 １階小ホール

■ 参加者数　　５０名（１０日）、４８名（１７日）、４７名（２４日）、
４３名（１０月１日）　合計　１８８名

■ 内　　容
講師　　京都府立京都学・歴彩館　資料課　大塚　活美
「私の洛中洛外図研究」（全４回）
第１講　私の洛中洛外図研究１　１９８０年代ー室町時代の作品ー
第２講　私の洛中洛外図研究２　１９９０年代ー江戸時代前期の作品１ー
第３講　私の洛中洛外図研究３　２０００年代ー江戸時代前期の作品２ー
第４講　私の洛中洛外図研究４　２０１０年代ー江戸時代中期の作品ー

■ 講座の様子
“ところ変われば品変わる”という言葉がある。『日本国語大辞典』第一版によれば「土地が違えば、それにしたがって風俗・習慣・言語などが違う」という意味である。研究の分野でも似たようなことが言える。一つの研究テーマであっても、研究を行う時代、その社会背景が変われば同一テーマも見方が変わっていく。それを繰り返すことによって、一つの主題が多角的に追求され、研究が進展していく。
９月度のミニ講座は、長年に渡り洛中洛外図の研究を行ってきた講師から、１９８０年代以降自らが積み重ねてきた研究について、問題関心の推移・影響を受けた研究などに触れながら説明があった。一口に洛中洛外図と言っても全て同じ構図で描かれている訳ではない。描かれた場所、描かれたもの、さらに図の注文主に注目することで洛中洛外図の資料評価が多角化していく。自己の研究に基づく講義は具体的で分かりやすく、各回多くの参加者を得ることができた。講座のまとめとして、講師が今後取り組む予定の研究課題も提示された。一つの資料を多角的に分析し、最大限の情報を引き出す重要性と長期的な視点にたった研究の継続性が大切であるということが分かる内容で有意義な講座となった。